

三春歳時記 如月きさらぎ

2月の別名・如月は、いわれがよく分かっておらず、特に「如」という漢字との関係が不明です。そんな中でも寒い時期であるため、衣きぬを更に着るので「着更衣」と呼んだという説が一般的です。また、草木の新たな生育が始まる頃なので「草木張月」が変化したとも、「生更木」といった説もありますが、これらは3月の弥生にも通じる語源です。ほかに「令月・麗月」や、梅見月・梅津月といった呼び方もあります。

二十四節気では、3日が立春、18日が雨水にあたり、もっとも寒い寒が終わって、雪や氷が解け、雨が降る春を迎える時期です。立春の前日が、季節を分ける節分です。元々は、立春・立夏・立秋・立冬の前日で、四季を分ける4日すべてを節分と呼んでいましたが、いつからか立春前だけを呼ぶようになりました。また、旧暦だと前年のうちに節分・立春を迎えることも少なくなく、一年の最初の季節が始まるこの日を年越しと考え、八十八夜や二百十日などの起点の日でもあります。

三春の節分行事として、江戸時代の三春藩家老・細川家での例を紹介します。細川家では、夕方の七ツ時（4時前）に、空焼きした田作り（鰯）を串に刺して、各所の戸口に柎の枝とあわせて挿しました。半時後（5時前）に焼物・汁・香物・ザクザク煮しめ・飯の祝膳を食べ、神仏に供え物をしました。その後、汁を煮た鍋で大豆1升を炒って、升に入れて台に載せ、暮六つ時（6時前）に袴を着けた若党が、当主に祝を口上して、神棚の前に立ちます。そして、「大神宮様にあげます」と豆2粒くらいを2度撒き上げ、「年神様、稻荷様、恵比須様（ほか10神略）、そのほか神々様にあげます」と唱えて撒き上げ

ました。それより、座敷から豆を撒き始め、恵方に向かって「福は内」、明の方に向かって「鬼は外」、再び恵方へ「福は内」と唱えて撒き、各部屋を回って台所で終わりました。それから、若党が当主にお祝いを申し上げますと、結わえた扇子2本と50文をいただきました。そして、自分の年より1つ多く豆を数えて、灰汁を混ぜて花紙に包んだもので全身をなでました。それに銭12文を添えて、大町四つ角に落として厄落としをした後、福茶をこしらえて祝ったということです。

これは、上級藩士の例ですが、今でも似たようなことをしている家も少なくないと思います。こうした春を祝う家庭行事の継承が望まれます。



- 寄附・ポランティア
 していただいた方々
 (令和6年11月22日)
 (令和7年1月8日)
 (敬称略・順不同)
- 【三春町へ】
- ◎ 一般寄附
 - ・ みはる歌仲間
 - 【三春町社会福祉協議会へ】
 - ◎ 寄附
 - ▽ 地域歳末たすけあい募金
 - ・ 郡山信用金庫三春支店
 - ・ 三春町仏教和合会
 - ・ 増子忠一（山田）
 - ▽ 物品
 - ・ 遠藤久美子（熊耳）
 - ・ 増子忠一（山田）
 - ◎ ポランティア
 - ・ 三春町赤十字奉仕団
 - ・ 鷹巣サロン
 - ・ 安齋ひかり（中町）
 - ・ 國分シヅ子（新町）
 - ・ 齋藤キミ子（南町）
- 【ふるさと三春町応援寄附金】
- ・ 佐藤敦信
 - ・ (神奈川県横浜市)
 - ・ 和田美和
 - ・ (大阪府守口市)
 - ・ 山田淳子
 - ・ (茨城県美浦村)
 - ・ 大中慶昭
 - ・ (東京都稲城市)
 - ・ 土橋和弘
 - ・ (長崎県五島市)
 - ・ 飯嶋 綾
 - ・ (神奈川県横須賀市)
 - ・ 熊田 学
 - ・ (愛知県豊橋市)
 - ・ 沼田 憲
 - ・ (東京都調布市)
 - ・ 羽尾竜二郎
 - ・ (埼玉県さいたま市)

広告欄